博雅文库
BOYA WENKU

日语教育与日本学研究

——2016年日本学国际研讨会暨中国日语教学研究会年会论文集

主编／许慈惠　副主编／窦心浩　高　洁　盛文忠

華東理工大學出版社

博雅文库
BOYA WENKU

日语教育与日本学研究

——2016年日本学国际研讨会暨中国日语教学研究会年会论文集

主编/许慈惠　副主编/窦心浩　高　洁　盛文忠

安徽师范大学图书馆
藏书

華東理工大學出版社
·上海·

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学研究:2016年日本学国际研讨会暨中国日语教学研究会年会论文集:汉、日 / 许慈惠主编. —上海:华东理工大学出版社,2017.10

ISBN 978-7-5628-5192-9

Ⅰ.①日… Ⅱ.①许… Ⅲ.①日本-教学研究-高等学校-文集-汉、日 Ⅳ.①H369.3-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第238442号

项目统筹 / 金美玉
责任编辑 / 金美玉
装帧设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司
地址:上海市梅陇路130号,200237
电话:021-64250306
网址:www.ecustpress.cn
邮箱:zongbianban@ecustpress.cn
印　　刷 / 江苏凤凰数码印务有限公司
开　　本 / 787mm×1092mm　1/16
印　　张 / 20.5
字　　数 / 494千字
版　　次 / 2017年10月第1版
印　　次 / 2017年10月第1次
定　　价 / 198.00元

版权所有　侵权必究

前　言

2016年11月12日，上海外国语大学日本学国际研讨会暨中国日语教学研究会年度大会隆重召开，共有来自中日韩三国的日语教育和日本学研究者、研究生近250人参加了这次盛会。在会上，教育部日语专业指导委员会主任·天津外国语大学校长修刚教授、东京外国语大学副校长林佳世子教授、日语语法学会会长·早稻田大学著名语言学家森山卓郎教授分别做了题为“日语专业教学改革的几个关键问题”“东京外国语大学的国际化与国际日本研究”“日语的交际与音声”的基调报告。随后的分科会上，来自国内外各高校的140余名专家学者和研究生发表了有关日语教育、日本语言、日本文学、日本文化、日本经济、日本社会、日本政治等领域的最新科研成果。通过本次大会的交流，我们对高校日语教学的改革动向有了更明晰的把握，同时也对日本学研究的新领域新方法有了更深入的了解。

我国高校的日语教学始于20世纪50年代末，至今已有近60年的历史。经过几代人的不懈努力，高校日语教学已经达到了新的高度。据日本国际交流基金2012年的统计，我国共有1153所高校开设日语课程，拥有1万1271名教师和67万4005名学生，上述三项均居世界第一。我国高校中的日语专业和非专业学生人数占全世界高校的63.4%，面对如此庞大的日语学习者群体，教师该如何不断提升自身的教学与科研水平，使学生学有所获，是日语专业亟待解决的重要课题之一。在高等教育逐步由大众化向普及化过渡的时代，社会需求以及学生的个性、兴趣和学习能力的发展乃至理想日趋多样化，与此相应从教学目标到教学内容和教学方法，日语教学的改变势在必行。而在另一方面，学生生态也随着社会大环境功利化趋势而下滑。如何在教育界小环境中力所能及地、竭尽所能地设计出一套行之有效的日语教学体系，在“社会现实”与“自我作为”之间取得平衡，这是目前包括日语专业在内的高校教育与管理的当务之急。

作为2016年国际研讨会的主要成果，本书共收集了中日两国学者的48篇论文，其中日语教育研究15篇、日语语言研究16篇、日本文学研究9篇、日本经济文化与社会研究8篇。在高校日语教师和科研人员中，日语和日本文学研究历来是最主要的研究方向，随后关于日本文化和日本经济的研究也逐渐增多。近年来，又出现了一个新的动向，日语教育研究逐渐成为大家所关注的研究领域。高校日语专业教师常年活跃在教学第一线，与学生交流互动较多，能够获得日语教育与管理的第一手资料，对这些资料进行科学的整理和分析，将有助于进一步提高日语教学质量以及为此必需的管理水平。在本次国际研讨会参会论文和论文

集的审稿中，我们也欣喜地看到，关于日语教育的论文增加较多，而且研究内容和研究方法丰富多样，能够为教学实践提供有力的支持。希望日语教育研究和日本学各领域的研究能够在质与量两个方面都不断进步，使我国真正成为日语教育和日本研究的大国、强国。

最后，要特别感谢中国日语教学研究会、教育部外国语言文学类教学指导委员会日语分委员会、日本国际交流基金、上海外语教育出版社、环球翔飞教育集团、华东理工大学出版社、大连外国语大学《东北亚外语研究》编辑部、浙江工商大学出版社向本次国际研讨会提供的支持和赞助。

编 者

2017年8月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　录

·日语教育·

日本語の複合語アクセントと中国語母語学習者のアクセント付与意識
…… 森山卓郎　李光赫(2)
日本語教師の教室活動 …… 中川良雄(10)
日语数量词声调教学 …… 凌　蓉(17)
论基于学科竞赛的日语专业卓越人才培养 …… 马燕菁(24)
英語話者による存在場所「に」と範囲限定「で」の混同
—中国語話者と韓国語話者のデータと比較して— … 岡田美穂　林田実　岩田祐佳(29)
日本語聴解授業における協働活動の試み
—学生の学習意欲向上を中心に— …… 俞　歓(34)
言語知識と口頭言語運用能力の関係を探る
—中国日本語専門八級試験とACTFL-OPIを中心に— …… 曹　娜(39)
中国の教材編成からみる多読授業の位置づけ …… 伏　泉(44)
日语专业精读与二专精读课程考核之统计比较分析
——以上海交通大学学生成绩为对象 …… 于　杨(49)
基于 moodle 平台多模态日语听力教学行动研究…… 朱秀丽(56)
格问题在日语教学中的认知性浅析
——以初级语法教学中的“に”格为例 …… 闫姗姗(62)
日中接触場面におけるフィラー使用の特徴 …… 葛欣燕(68)
中国における日本語専攻学習者の自信は何によって失われたか
—動機減退という視点からの探索的研究— …… 許　晴(74)
不同意表明における中日母語話者の逆接対比表現の使用
—自然会話データをもとに— …… 王　琪(82)
初級日本語文法授業における中国語使用の効果
—学習者意識の変化に関する考察— …… 雍　婧(90)

·日语语言·

話し言葉「とか」の意味機能の再考察 …… 劉暁傑(98)
中日両言語における接尾辞「化」の意味用法に関する研究 …… 任川海(105)
同一日常会話場面における日中「言語行動表現」の比較 …… 夏　藝(113)
连体修饰节中动词的「ル」形与「タ」形的考察
——以新闻照片说明为对象 …… 刘志毅(121)
中日数量詞の異同に関する一考察 …… 呉鑑萍(127)
「『こと』+『だ』」及び「『ところ』+『だ』」文に見られる特徴について
…… 河野亜希子(134)
日本語「下」の基本意味についての一考察 …… 宗　聡(140)
新聞社説における冒頭文・末尾文の日中対照研究
—機能内容と表現形式を中心に— …… 単艾婷(148)
共感覚比喩表現においてのメタファー
—五感形容詞の転用を中心に— …… 尹雪揚(155)
ポライトネスの普遍性について …… 王春瑩　孫　遠(160)
日本語の非情物主語の受身文への一考察
—中国語との対訳文と中国語母語話者の誤用例を基に— …… 路敏敏(166)
「Vての」連体修飾構造の意味関係 …… 姜　柳(173)
授受動詞「ヤル」文についての一考察
—抽象的対象物を中心に— …… 馬玥婷　彭　佳(179)
中国語の形状類別詞の和訳における等価
—喚起力の比較分析を中心に— …… 王丹楓(187)
なかなか・かなりの意味についての一研究
—主観性を中心に— …… 賀亜茹(194)
「テアル」構文について
—動詞と修飾文節から見るテアル文の結果性— …… 劉若曦(201)

·日本文学·

第三人称私小说的叙述方式
——以田山花袋《棉被》为例 …… 曾峻梅(210)
『更級日記』における「竹芝伝説」をめぐる一考察 …… 梁海燕(215)

小説言語と吃音
—三島由紀夫から小島信夫へ— …… 山本幸正(222)
与謝野晶子とキリスト教 …… 孫菁菁(229)
中日の歴史小説における虚と実
—森鷗外『魚玄機』と趙景深『女詩人魚玄機』の比較をめぐって— …… 孫天琪(235)
苏醒在现代的妖怪
——以大庭美奈子的《山姥的微笑》为中心 …… 周晗玮(239)
母性的なもの——癒しの妙手
—「キッチン」の再読— …… 張彩虹(246)
盲信が大敵——「酒虫」論 …… 劉鶴鶴(251)
校歌翻译过程中的原则探讨
——以县立广岛大学校歌中译为范例 …… 揭瑶函(257)

·日本经济文化与社会·

中国における消費者の変化と流通業の課題について
—「爆買い」から読み取れるものとして— …… 金 琦(264)
大学的国际化与学生短期出国留学——挑战与对策 …… 高 洁(271)
天照大神的性质 …… 李濯凡(277)
日本政府债务问题形成的本质原因及其可能结果 …… 瞿晓华(283)
伝統小売業とB2C 電子商取引の共存性分析 …… 孫健美 葉明月(290)
从日本的报刊中看“中国服”在日本流行的起因及其过程 …… 刘玲芳(298)
日本高校外语类专业的组织变迁——以外语系为中心 …… 张 弢(304)
大学生の学習体験における階層間格差に関する実証研究
—日本語科を事例として— …… 余子婷(311)

·日语教育·

日本語の複合語アクセントと中国語母語学習者のアクセント付与意識

早稲田大学　森山卓郎
大連理工大学　李光赫

1　はじめに　—アクセントの融合—

一般に単純語が複合した場合、アクセント融合(後部要素の1拍めにアクセント核がくることが多い)が起きる場合と起きない場合がある。例えば「ハンバーグカレー」を「ハンバ'ーグLHHLL」「カレー LHH」と別々に発音すれば、二つの語と認識されやすくなるが、「ハンバーグカ'レー LHHHHHLL」のようにアクセント核を一つにすれば、「ハンバーグカレー」という一つの名詞になる(本稿では高い拍をH、低い拍をLと表示し、あわせてアクセント核の位置を「'」で示す)。ただし、複合語のアクセントのルールは複雑で、例えば、後部が三字以上の漢語におけるアクセント融合においては、後部要素が複合語の場合、

(1) ゆうめい＋[せいじか]→ゆうめいせいじか　LHHHHHHH

(2) きょ'うと＋[すいぞく'かん]→きょうとすいぞく'かん　LHHHHHHLL

のように、後部が平板なら全部が平板に、後部にアクセント核があればそのアクセント核に従う(秋永1981、定延1991)。

一方、面白いことにアクセントの融合が起こらない場合もある。

(3) にほん＋しゅうへん→にほん/しゅうへん(日本周辺)

のような場合である(窪薗1987は、複合化のアクセント規則 compound accent ruleに従わないと言う点で「非複合化複合名詞」と呼ぶ)。このようにアクセントが融合しない場合を二つの要素がそのまま「結合」しているとして、「　/　」で表すことにする(定延1991はアクセントの谷と呼ぶ)。別々のアクセント句が結合しただけの「複合語」であり、いわば臨時的な複合でしかない。「日本周辺」「日本の周辺」はほぼ同じ意味だが、

(4) 晴れの日が多い日本周辺では海水温度が上昇している。

(5) 晴れの日が多い日本の周辺では海水温度が上昇している。

のように、「晴れの日が多い日本の周辺」では「晴れの日が多い日本」でまとまる可能性が比較的大きくなる。

ただし、「国内、全国、付近」は融合し「日本国内にほんこ'くない」のようになるが、「周辺、全域、北部、近海」は非融合で、「日本周辺」は「*にほんしゅ'うへん」にならない。この違いは、日本語学習者にとって難しい。ここでは複合語におけるアクセント融合・非融合の問題を日本語学習者の立場に立って考えてみたい。

2　二要素の結合におけるアクセント非融合現象分析の諸観点

2.1　アクセント非融合現象と文法的関係

アクセント非融合現象は複雑な現象である。まずA＋Bという二要素の結合を考える①。

最初に挙げるべきは、文法的な構造の反映である。並列的な構造の場合や主語述語関係の場合、目的語＋動詞の場合では、アクセント融合は起きないことが多い(窪薗1987)。これは、一般に、融合すると後部に主要部がある解釈になることが多いからであろう。

(6) 同格: せんさ＋ばんべつ→せんさ/ばんべつ千差万別

(例)大義名分、茫然自失

(7) 主語述語: にんき＋まんりょう→にんき/まんりょう任期満了

(例)選手宣誓、意味深長

(8) 目的語＋動詞: けんぽう＋かいせい→けんぽう/かいせい憲法改正

(例)内閣改造、門戸開放

ここから、①後部に主要部がある解釈になることを阻止するため同格構造は融合が阻止される。②述語のある表現は、「語と語のその場での組み合わせ」という意識が働くため、融合が阻止されやすい、といえる。もっとも、主述関係の場合でも、例えば、

(9) ゆくえ＋ふめい→ゆくえふ'めい　行方不明

のようにアクセントが融合する場合がある。この場合、ここでは、

(10) 行方不明が5人いる。

のように名詞化が進んでいると見たい。同じ「～不明」でも、「意味不明は～」と言えず、「～ハ意味ガ不明デアル」という述語的な意味である。その場合に融合しにくい。

こう考えてみると、窪薗1987で指摘されている、「意識喪失」と「自信喪失」の違いも少しは説明できる。「意識喪失」が「意識の喪失」とも解釈でき、

(11) 意識喪失が起こる

のように主語としても問題なく使えるのに対して、「自信喪失」は、

(12) 自信喪失が起こる

などと言いにくく、「自信を喪失する(こと)」のような出来事を表すような用法が中心である。このように、述語性が明確にでるかどうかが融合の有無にかかわる可能性がある。アクセント非融合の一つの場合に、述語性があると言う特質も考えられる。

---

① 音声的要因も関わる。例えば陳2016は、「環境保全(融合)と「負担軽減」(非融合)のように、同じ『後部要素が動作をあらわし,その後部要素を述語と見たとき前部要素がヲ格に相当する」場合でもアクセントが融合する場合と融合しない場合があることを指摘する。そこから、「同じ7モーラの語（平板型＋平板型)でも,構成要素のモーラ数が3＋4よりも4＋3の方が融合率が高い」「3＋4モーラの語でも,「平板型＋平板型」よりも「頭高型＋平板型」の方が融合率が高い」「後部要素が3モーラのとき,その3モーラの形態素構成が2モーラ＋1モーラより,1モーラ＋2モーラの方が融合率が高い」などの傾向を指摘している。本稿ではこうした音声的特性については十分に考察できていない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

2.2 アクセント非融合現象と語彙的意味

次に、語彙的な問題も見てみたい。窪薗1987には、説明が難しい場合として、「衆議院議長しゅうぎいんぎ'ちょう」と「防衛庁長官ぼうえいちょう/ちょうかん」が挙げられている。同じような構成にもかかわらず、そして、語彙的にも一定の慣用性があるにもかかわらず、片方が融合し、片方が融合しない。

融合しないものとして同論文で挙げられているのは、次のような場合である。

(13) a 姓＋名(須藤耕作)、
b 組織名＋役職名(自治会会長)、
c 氏名＋地位(加藤教授)、
d 順番を表す名詞＋地位/役職(初代＋会長)、
e 地域名＋地域をさらに指定する名詞(近畿南部)

これらに関連して、定延1991は、

(14) a 目標を表す名詞＋動詞(当駅到着)、
b 場所＋動詞(都内在住)、
c 時間＋動詞(近日上映)、
d 役職＋氏名(捕手斉藤)、
e 場所や時間の名詞＋順位や評価(今世紀最大)、
f 名詞＋「独特・特有・専用」(社長専用)、
g 場所を表す名詞＋「名産・周辺・所収」(新年号所収)、
h 形容されるものを表す名詞＋形容する擬音語擬態語(虎視眈々)、
i「要」＋動作を表す名詞(要検討)、その他(感無量、準備万端など)。

などの構造が非融合になるとしている。

これらの関係をもとに整理するならば、アクセント非融合の複合語においては、「第九回NHK全国のど自慢大会」のように、回数、開催場所、所属等は、臨時的に組み合わせるべき情報としてアクセントが融合しないと言える。

もちろん構造的に、三つ以上の要素での枝別れ構造も反映する。例えば、

(15) にほ'ん/ぎんこうきょ'うかい　日本銀行協会

のように、「A＋[B＋C]」という後部にまとまりができる右枝別れの場合には、AとBの間で複合させると、意味的な誤解が生じる点で、Aの後の融合は避けられる。

もう一つ、融合が発生しないものとして、「項」をとる成分による非融合の枠組みがある。後ろに来る成分が「～専用」「～周辺」「～南部」のような構造は、一種の臨時的な構造を、融合した関係にはならない。組み合わせの意識が強く残るからと考えられる。

一方、融合する場合については、上位下位のカテゴリー関係があり、前項部分が後項部分をより限定的にする場合が多い。例えば、「しょうがっこうきょ'ういん　小学校教員」は、融合するが(「しょうがっ'こう/きょういん」という発音も可能)、「しょうがっ'こう/こうちょう」では融合は起こらない。「○○教員」は、それぞれ「教員」のカテゴリーわけをするものとしても解釈され、その場合には融合が起こると見られる。一方、「小学校校長」は、「所属＋地位」という解釈がなされる。

「日本銀行職員」という言葉が特殊詐欺防止のポスターにあるのを見たが、特殊な銀行

の「職員」として、すなわち「職員」の一種のようにとらえられれば、一語化して、「にほんぎんこうしょ'くいん」のような発音ができる。これに対して、「日本銀行幹部」などになれば、地位を表すだけになり、融合が発生しない。

ただし、語彙的な融合の成熟度に違いもある。例えば前述の「衆議院議長しゅうぎいんぎ'ちょう」が融合するのに、「防衛庁長官ぼうえいちょう/ちょうかん」は融合しない。「町内会議長ちょうないかい/ぎちょう」のようにふつうは融合しないが、「衆議院議長」が融合するのは個別要因としての語彙的成熟度の問題であろう①。

2.3 三語以上の多重結合の場合

三語以上からなる複合語に非融合部分が存在する場合、融合部分と非融合部分が混在することになる。例えば、「けんぽう/かいせい」(憲法改正)に対して、「憲法改正法案」のように三語になると、「改正法案」の部分で融合が発生し、

(16)(けんぽう＋かいせい＋ほうあん→け'んぽう/かいせいほ'うあん憲法改正法案

となる。最後部で融合が起こっていることに注意したい。さらに複合した場合、

(17) け'んぽう/かいせい/ほうあんし'んぎ　憲法改正法案審議

のように、やはり最後部分で後部要素が融合を起こす。さらに、長い場合には、

(18) けんぽう/かいせいほ'うあん/しんぎいい'んかい　憲法改正法案審議委員会

のようになる。最後部以外は、非融合のまま結合させて、「審議委員会」の部分のみ融合する。ここから、三つ以上の要素からなる複合語の場合、最後の部分でアクセント融合が発生し、それ以前の部分は非融合のまま結合するといえる。例えば、「日本語指導計画」では、「日本語/指導計画　にほんご/しどうけいかく」というまとまりができ、「日本語指導改革計画」では、「日本語指導/改革計画　にほんごし'どう/かいかくけ'いかく」ないし「日本語/指導改革計画　にほんご/しどうかいかくけ'いかく」のようにまとまる。さらに、「日本語指導特別改革計画」では「特別改革計画」が意味的にまとまるので、部分的な融合が発生し、「日本語指導/特別改革計画　にほんごし'どう/とくべつかいかくけ'いかく」のような二つの部分に大きく分割され、前半と後半にはそれぞれに融合が起こる。部分のまとまりができることで、構造がわかりやすくなるとも言える。

2.4 文相当の一語化

もう一つ、主張を表す臨時一語とでもいうべき場合にアクセントが融合しないという現象にも触れておきたいと思う。例えば、「入場無料(の催し)　にゅうじょうむ'りょうLHHHHLL」のように「入場無料」で融合する発音が可能であるが、例えば店員が呼び込みをして、「ただいま、入場無料！」では、「にゅうじょう/むりょう！LHHHLHH」のように言う。この場合は、「入場が無料である」といういわば主張を表す「文相当の臨時一語」構造であり、

① 語彙的現象と文法的現象の区分について考える場合、ここで挙げたような融合·非融合現象には一定の文法的規則性も認められるが、語彙的連続性もある。文法と語彙について明確に区分されるという影山(1993)のようなアプローチに対して、森山(1988)はそこでの連続性を指摘する。

(19) [三十分までの入場]無料です。

「にゅうじょう/むりょう」のように「無料」がいわば述語扱いである。同様に、「駐車禁止」も、単に「駐車禁止の区域」と言う場合と「この付近では駐車禁止」のように言う場合とでは発音が違う。前者の場合には融合を起こした発音が可能であり、「ちゅうしゃきんしLHHHHHHないしLHHHLL」であるが、後者の場合には、「ちゅうしゃ/きんしLHH/LHH」のように、融合が起きない。いわば文相当の場合には融合はしないのである。

3 日本語学習者の発音の複合語アクセント付与意識

では、日本語を学習する中国語母語話者が日本語を発音する場合はどうなのだろうか。大連理工大学外国語学院の2年(後半)の学習歴のある学生(N2中級レベルと呼ぶ)の発音と同大学院の学習歴5年(後半)の大学院生(超級レベル)の発音を採取し、そこでの融合・非融合について調べてみた。

3.1 多重結合—「日本語指導特別改革計画」と「日本語指導計画」—

「日本語指導計画にほんごしどうけ'いかく」「日本語指導特別計画にほんごし'どう/とくべつけ'いかく」について、「～が発表されました」という文での音読を採取したところ、中級学習者の「日本語指導計画」の発音は次のようであった。

(20) 非融合型3名　にほんご/しどう/けいかく　LHHHLHHLHHH
　　後部部融合2名　にほんご/しどうけいかく　LHHH/LHHHHHH
　　前部融合型2名　にほんごし'どう/けいかく　LHHHHLL/LHHH/LHHHhHH/LHHH
　　全体融合型3名　にほんごしどうけ'いかく　LHHHHHHHhHHH

全体融合型では、発音上は「け」が特に高く、「LHHHHHHHLLL」のようにはなっていない(特に高い拍をhで表す)。融合するにあたって、同じ高さからHLというように下がるのではなく、結合部分で高い拍になるという発音である。アクセント核に対する意識があるものの、予備的に核がある部分を高く発音するという発音上の癖と言える。以上、中級の学生は、3名を除くと皆融合しない部分があり、不自然な発音となっていた。

超級の大学院生は、融合させた発音が比較的多かった。

(21) 全体融合型　にほんごしどうけ'いかくLHHHHHHHLLL6名
　　(下降のないパタン「LHHHHHHHHHH」がうち1名)。
　　後部融合型にほんご/しどうけ'いかくLHHHLHHHLLL　3名
　　(うち、LHHHLHHLLLL、LLLLLLLLHHHが各1名)

では、「日本語指導/特別改革計画」の場合はどうだろうか。中級学習者では、

(22) にほんご/しどう/とくべつかいかくけ'いかくLHHHLHHLHHHLHHHhHHH

のようなパタンが9名であった(うち5名が「かいかくけ'いかく」という融合的な発音。平板に続くパタン1名。LHHHLHHLHHHLHHHLHHHと最後の「計画」が「HHHH」のように平板なパタンが各1名)。中級の場合、「日本語指導特別改革計画」のような長い語の場合、とにかく最初から分割していくという意識が見られる。前半部分で意味的にまと

まる場合には融合させるという意識はない。

超級の場合、「日本語/指導」の部分での分割は5名で、相対的には少なかった。「にほんごし'どう」という融合させた発音が5名である。一方、次の「日本語指導」と「特別改革計画」の間は、9名が分割した。さらに、9名が「改革計画」の段階で融合した発音であった(ただし「けいかく」の部分が平板な者が1名あった)。これらは母語話者の分割意識と同じである(「計画」については、ほかに「LHHH」のように独立した平板型で結合した者が1名あった)。最終成分でのアクセント融合がある。なお、同じ高さからHLというように下がるのではなく、結合部分で高い拍になるという高い発音の拍(hで表す)は、超級者では見られなかった。

以上から、中級者には、意味的にまとまる場合は融合させること、最終部分での融合が起こること、などを教えるといいように思われる。また、特に高い発音にしない(hにしない)ことにも注意させるといいであろう。

3.2 一語文化—作業開始！—

次に、「作業開始!」のように呼びかける発音を見た。中級学習者の場合、「さぎょう/かいし」という分割した発音は、4名であった(うち2名は「さぎょう」を頭高に、2名が平板に発音)。一方、4名が融合する、

(23) 融合型4名　さぎょうかいし　　LHHhHH

のような発音であった。このほかには「LHHHHH」のように全体を平板にした者も2名あった。この2名も分割していない発音と考えると、過半数が分割した発音となっていない。

「さぎょう」をLHHのように低く始まる平板な発音をしたものが8名であった。平板なアクセントが比較的多いとされていることから、無標の発音として平板型が選ばれたものと思われる(「さ'ぎょう」という発音は2名であった。この2名は、「さぎょう/かいし」のように分割していた)。

一方、超級では、全員が「作業/開始」というように分割していた。多かったのは、

(24) 8名さぎょう/かいし　　HLLLHH

のような発音であった(ただし、個々のアクセントはまちまちで、「かいし」を平板に発音しない者が2名「さ'ぎょうか'いし」)。ただし、「作業」の部分でもアクセント核があることから、非融合の結合関係として解釈される。

3.3 句を含む構造—「三十分までの入場無料」と「三十分までの入場制限」—

最後に、「三十分までの[入場制限]があります。」「[三十分までの入場][無料]です。」の二つの文での「入場制限にゅうじょうせ'いげん」「入場無料にゅうじょう/むりょう」の発音を取り上げたい。中級者では、「入場制限」は、6名が融合型であった。

(25) 融合型6名　にゅうじょうせ'いげん

(LHHHhHHH3名「LHHHHLLL」2名平板1名)

分割型4名　にゅうじょう/せいげんLHHHLHHH

超級の場合、「入場制限」は、9名が融合型であった。

(26) 融合型9名　にゅうじょうせ'いげんLHHHHLLL7名、
(1名ずつ、「LLLLHLLL」「HHHHHLLL」という発音。
分割型1名　にゅうじょう/せいげ'ん　LLHHLHHL」)
このように超級の「入場制限」の発音は融合型の発音が大多数であった。
これに対して、「入場/無料」では、中級学習者の場合、融合型が多かった。
(27) 融合型7名　にゅうじょうむ'りょう　LHHHhHH
(28) 分割型3名　にゅうじょう/むりょうLHHHLHH
超級者は、「入場無料」の場合にも正しく対応していた。すなわち、
(75)分割型9名　にゅうじょう/むりょう　LHHHLHH
どちらとも言えないもの1名　LHHHHHHH(平板)①
となっていた。中級者では構造的に分割すべきかどうかの判断ができていない。

4　おわりに

以上、複合語の発音について検討してきた。非融合現象が起こる場合は、結合が臨時的だという意識があるものとしてまとめられる。すなわち、回数、開催場所、所属などの臨時的に組み合わせるべき情報の場合、同格構造や後部に述語があり「語と語のその場での組み合わせ」という意識が働く場合、特に、「～専用」など「項」をとる成分による非融合の枠組み、「入場無料！」のように一語文になっている場合、などである。ただし、多重複合語の場合には最後部分で融合が発生し、それまでの部分でも融合が起こることもある。

こうした大まかな傾向を知っておくことと、個別の語彙的現象に注意することとで、ある程度複合語のアクセントは習得可能なように思われる。

一方、融合する場合には、カテゴリー修飾関係での融合の枠組みというべき場合があり、上位下位のカテゴリー関係があり、前項部分が後項部分をより限定的にする場合などが挙げられる。これは、一語としての位置づけを明確にすべき場合だと言える。このほか、語彙的に成熟する場合には融合するということも挙げられる。

こうした融合・非融合の傾向に対して、中級学習者は必ずしも十分な発音の区別ができていない。最初から分割していくという意識が見られた。最終部分での融合という発音についての意識づけも十分なものではなかった。「作業開始！」のような一語文化した発音について、中級者は、アクセント融合のある複合名詞としての解釈をした者が一定数あった。これに対して、超級者になれば、このパタンについての発音が意識できていた。

「入場無料」のような一種の述定的意味を持っている場合も、母語話者では、構造的に組み合わせるという意識がある点で分割されるが、中級学習者では融合させた発音が多かった。超級者の場合、全員が同じ発音というわけではなかったが、分割、非分割についての意識が相当程度進んでおり、一定程度それを反映させた発音をしていることがう

① こうした非一般的な発音をした者はそれぞれに別個であり、同一人物ではない。

かがえた。それには構造に関する意識が重要であるように読み取れる①。

課題も多い。非融合には様々な場合がある。先行研究も膨大である。今回整理したいくつかの典型的な方向性についても、十分な理論的裏付けができているわけではない。学習者の発音の収集も、一度だけの発音である。学習背景についての詳しい調査もしてはいない。今後、さらに調査を進め、わかりやすい教授法を考えていきたい。

参考文献

[1] 石井正彦.臨時一語と文章の凝縮[J].国語学,1993(173):91-103.
[2] 影山太郎.文法と語形成[M].東京:ひつじ書房,1993.
[3] 窪薗晴夫.日本語複合語の意味構造と韻律構造[J].南山大学アカデミア,1987(43).
[4] 窪薗晴夫.語形成と音韻構造[M].東京:くろしお出版,1995.
[5] 定延利之.現代日本語東京方言における合成的字音語のアクセントと字数について[A].ネブリュー(Osaka-Gaidai Linguistics Circle)[C].1991.
[6] 朱春躍.語音詳解[M].北京:外研社,2001.
[7] 田中伊式.複合名詞の発音とアクセント[J].放送研究と調査,2017(1).
[8] 陳曦.2要素からなる4字漢語のアクセント:後部要素が動作をあらわし,前部要素がヲ格に相当する場合[A].音声学会全国大会予稿集[C].2016.
[9] 林四郎.臨時一語の構造[J].国語学,1982(131).

① 発音の意識についての簡単な記述をお願いしたが、中級者の場合は「よくわからない」といった回答であった。超級者の場合にも特に明示的な記述はなかったが、学習するうちに発音になれていくということありそうである。今後の課題としたい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com